

## 基調講演

# 「子どもが忌避される時代」

本田和子（元お茶の水女子大学学長 お茶の水女子大学名誉教授）

「子ども」とは、いつの時代にも、その稚拙な言動を許容され、時にはそれを楽しまなげで享受されて、愛され慈しまれる存在であり得たのだろうか。過去から未来へとタイムスパンを長くとり、子どもを視野に入れつつ社会変動を回顧展望する時、「子ども」と「大人」は、常に一定不変の関係を取り結ぶ存在ではなかったことに気付かざるを得ない。極言の誇りを恐れずに言えば、「子ども」とは歴史の産物であり、彼らが「どう見えるか」は、一にそれぞれの時代のまなざしに負うのである。

本日は、この視点に立って、少子化に戸惑うこの国のありさまと、必ずしもバラ色ではない「子ども——大人関係」の現状を考えてみることにしたい。子どもは、いま、暗い時代の希望の象徴とされ、未来の労働人口のゆえに不可欠の存在とみなされはするが、しかし、時として、彼らの言動は、疎まれ忌避され始めているのではないだろうか。

\*本原稿は第6回子ども学会議のプログラムのための原稿を再録いたしました。

### 〈プロフィール——子ども学とのかかわりの履歴——〉

昭和29年3月、お茶の水女子大学家政学部児童学科卒業。30年3月、同学部専攻科児童学専攻課程修了。尚絅学院短期大学、十文字学園女子短期大学に勤務し、幼児教育者・保育士の養成に当たる。

昭和45年より、お茶の水女子大学家政学部児童学科勤務、創設以来の宿題であった新しいジャンルとしての「児童学」の構築に参加し、旧師・同僚との協力のもとに、従来の3講座に加えて「児童社会学」「児童文化学」講座の増設を実現する。

これらの動きの集大成として、児童学科構成員の執筆による『児童学辞典』『児童における人間の探求』『人間現象としての保育研究』等が刊行されているが、「児童学」とは「子どもにかかわる総合学」であると同時に、「子どもによる近代諸学の問い直し」でもあるというのが、当時の学科構成員の共通理念であった。また、学問研究の成果の社会還元を企て、「現職研究講座＝保育現職者の夜間の研修機会」を開設して保育現職者のレベルアップを企てる活動にも参加している。

本田和子個人としては、メジャー領域としては「児童学」を、マイナー領域としては「子どもと文化・社会の関係」を課題とし、特に、子どもの文化史・文化論の考察を著書などの形で公表している。二、三、例を挙げれば、『異文化としての子ども』『変貌する子ども世界』『子ども100年のエポック』『子どもが忌避される時代』など。また、今秋、刊行予定のものに『子どもは年金のために産まれてくるのではない（仮題）』があり、子どもの社会にとっての「子どもの存在意義」を明らかにすることを試みている。

